



北海道バスケットボール協会
指導者育成専門委員会
2015/02/02(月)

タクティクス (HBA指導者育成専門委員会ブログ)

NO. 158

平成26年度 全国高等学校バスケットボール選抜優勝大会 北海道予選会をふり返って

11月7日(金)～9日(日) 会場 小樽市総合体育館・他

北海道バスケットボール協会
指導者育成委員 前野 和義

【男子の部】

優勝	東海大学付属第四高等学校
第2位	駒澤大学附属苫小牧高等学校
第3位	北海道札幌工業高等学校
第3位	海星学園高等学校

ウィンターカップ予選が4年振りに小樽で開催された。『うんが(運河)』大きく左右された前回の大会であったが、今回は安定した実力で東海大第四高校が全国の切符を手中に収めた大会となる。

6月の支部及び全道大会から国体予選会を経て、この11月まで選手生活を継続してきた3年生の努力を大いに称賛したい。

6月のインターハイ予選ではある程度、体力と勢いで勝ち上がることが出来たが、この時期には、更に高い個人技術とチーム力が備わっていなければ勝利することが出来ない大会である。また2年生の技術力アップも著しいものが見える時期であり、チーム力を支える大きな機動力となる立場である。大会結果は6月の選手権同様であり、名実共に今年度のベスト四はこの4校で締めくくることになる。

東海大四はインターハイベスト8の実力通り、エース内田を中心に白旗、辻の安定した外枠を布陣し、アップテンポのトランジションを持ち味にスタートより一気に体制を決める展開が多かった。決勝戦は2クォーターの駒澤のゾーンディフェンスに丁寧さが裏目に出てオフェンスリズムが取れずなかなか主導権を握れなかった。インサイドで崩せない課題が残ったが、内田選手の30ポイント以上を稼ぐオフェンス能力の高さには脱帽であった。ウィンターカップではベスト8掛けで好敵手能代工業との対戦する組み合わせであり、次の対戦である第一シードの福岡大濠高校との戦いが実現できるように、更にチーム力をアップして挑戦してもらいたい。

準優勝の苫小牧駒澤高校はインターハイ初出場、国体北海道予選を制する快挙の今年度であり、札工を1ゴール差で下しての決勝進出であった。札工とはH25年の新人大会の1回戦でシード権を持っている札工に勝利し決勝進出となる、翌年の新人戦では延長で札工が制し、今年度のインターハイ予選では流血の戦いとなり、これは僅差で駒澤が制してインターハイの切符を手にする。そして今大会もギャラリーを大いに湧かせる期待通りの1点を争う好ゲームになる。双方ファールトラブルがありながら良くゲーム

を維持する。同点で迎えた残り 23 秒、駒澤陣営でのエンドスローインでセンター折戸のジャンプショットで試合を決めたことはビックリあっぱれであった。結果オーライであったが 20 秒以上残してのワンプレーショットであり、タイムアウトの指示はどうだったのか知りたい。それにしても 2 年シューター山田の 7 本の 3 p ショットは圧巻であった。

決勝戦は 3 クォーターまでディフェンスの色を変えながらしっかりと食らいつき決勝戦に相応しい好ゲームであったと評価したい。

札幌工業高校は混戦の第 3 シードブロックで力のある白樺、札幌日大を破り勝ち上がる。主将板橋のゲームコントロールで、常にチームをリードし支配する力は素晴らしいものであった。特にディフェンス時の手の使い方はとても早く、審判は判定に苦慮する場面もあった。また 2 年生シューター濱尾も一回り体も大きくなり、駒澤の 2 年生山田とのマッチアップは大変見応えがあった。

海星学園は 6 月のインターハイ予選に引き続き、主将田口を中心としたプレーは益々健在で、バスケットボールの面白さを十分に引き立てる技を見せてくれた。

北海学園高校は 3 年生の息のあったコンビネーションプレーを展開し、特にスペースの作り方が大変上手であり、平均したメンバーの技術力が魅力であった。

函館大付有斗高校の 3 年庭田は 176cm とサイズのない中で体の使い方が絶妙に上手く、またボールコントロールにも秀いでたものがありチームを盛り上げる。

白樺学園は高さもあり上位進出の期待もかけられていたが、試合巧者の札工に惜敗する。ガードのボール保持が長い事が少し気になった。高さのあるインサイドの能力をもっと引き出す事が出来れば展開が変わったと感じられた。双方のチームのファイトが見られた好ゲームであった。

旭川大学高校は駒澤苫小牧に雪辱戦としてチャレンジする。確立の高い外角ショットと強力なオフェンスリバウンドを武器に戦うが、終盤疲れが出たのかショットが決まらず、オフェンスも単調になり逃げ切られる。勝負所でのディフェンスの粘りが欲しかった。

近年の全国大会（インターハイ・ウィンターカップ）の男子チームを観戦して思うのだが、選手の個人能力の高さが益々向上している。特にシュートの上手さとボールハンドリングの巧みさは目を見張るものがあり、そのことが原因なのか実にシンプルに点を入れてしまう。ショットに行くまでには次のようなプロセスあるのが原則である。

【捜す（スペース）→崩す（横ずれ、縦ずれ）→破る（ペネトレート）→決める】

それが崩すことなく入れてしまうほどのショットの感性が高い選手が多くなってきている。コーチは崩す過程に戦略戦術の楽しみがあるのだが、その点仙台明成高校の佐藤久夫氏はその過程に非常にうるさく敏感に指導をしていることがゲームを観てうかがえる。その事こそコーチ自身の哲学として身に付いていくものと感じさせる。北海道においてもその過程を大切に研鑽している指導者の多いことに嬉しさを感じる。

最後に 2 月 11 日から始まる全道新人大会は旭川で開催されます。新チームでの育成強化と更なる指導者の創意と工夫を期待しております。

『指導者は常に“無能”の自覚が必要だ』

中村和雄著「心をこめて」より

以上